

足関節周囲外傷の治療

直立二足歩行を行うわれわれ人間の足関節は、全体重を受け、地面に接する足に力を伝達する重要な関節である。逆に、足から入力された負荷は足関節機能によって減退する。このように、地面に近く、全体重が集中する足関節は大変過酷な環境にさらされており、外傷が起こりやすい関節である。

足関節を捻って受傷する足関節捻挫は、スポーツ外傷の中で最も頻度が高い。足関節には多方向に多数の靱帯が付着しており、捻挫によって多彩な靱帯損傷が生じる。外側靱帯損傷の発生頻度が高いが、三角靱帯や遠位脛腓靱帯損傷も少なくない。その評価と治療法はいまだ確立されていない。

足関節は脛骨の内果と天蓋、そして腓骨の外果に距骨がはまり込む「ほぞ」と「ほぞ穴」構造であり、骨性に安定した関節である。そのため骨折を生じることも多い。足関節果部骨折は手術治療が必要なことが多く、その治療法は時代とともにアップデートしている。足関節機能を維持するために果部はもちろんのこと、脛骨天蓋、距骨滑車の修復も必要であるため、ピロン骨折や距骨骨軟骨損傷に対する治療も重要となる。

足関節周囲は多くの腱が滑走する。足関節周囲外傷の中でも腓骨筋腱脱臼は比較的に見逃されやすく、治療に難渋することも多い。いずれの外傷も正確な診断と適切な治療によって構造の修復を行うことが必須である。その上で、機能回復を目指したりリハビリテーション介入が必要となる。外傷の種類、治療の内容と時期によって、リハビリテーションの内容は変化する。

足関節周囲外傷の種類は非常に多く、治療に携わる医師も一般整形外科医から足の外科医、スポーツ医、外傷医と幅が広い。治療に用いるツールも超音波、関節鏡、インプラント、創外固定など様々である。そして、術後リハビリテーションも非常に重要である。バラエティ豊富な内容を盛り込んだ本特集は、とりわけ足関節に造詣の深い先生方に執筆していただき、即座に応用できる実践的な内容となっている。足関節周囲外傷について理解を深めていただくと同時に、日常診療の一助になることができれば幸甚である。

(寺本篤史)